

日本の国土面積は世界の六〇番目で、最大のロシアの四五分の一でしかない。しかし、日本に主権がある海岸から一二海里の領海面積は国土面積の一・一倍以上あるし、海岸から二〇〇海里までの排他的経済水域になると国土面積の一二倍で世界六位、国土面積と海域面積の比率では世界四位に躍進する。また近海には世界最深のマリアナ海溝が存在するなど、日本は世界有数の海洋国家なのである。

その海洋の研究についても、有人の深海調査船舶では、六五〇〇mまで潜水できる「しんかい六五〇〇」を保有し、アメリカ、フランス、ロシアの六〇〇〇mを上回っている。さらに二〇〇五年夏に竣工した深海底掘削船「ちきゅう」は水深二五〇〇mの海底から地中に七五〇〇mも掘削できる世界最高の性能の船舶である。それ以外に、ケーブルなしで深海を三〇〇kmも無人探査できる「うらしま」も日本自慢の設備である。

そのような海洋国家でありながら、その利用は十分とはいえないのが現状である。一九九〇年代初頭まで、日本は世界一位の漁業王国であったが、現在では五位にまで低下し、かつては自給できていた魚介の自給比率は五割以下になっている。すなわち輸入が生産を上回っているのである。そして造船王国も一〇年前に韓国に首位を奪取され、現在では中国に急迫されている。産業の視点からの海洋王国は動揺している。

国民の海洋利用も同様に低落傾向である。ヨットとモーターボートを合計したプレジャーボートの台数は、やはり一〇年前が頂点であり、現在では八割以下に減少している。人口あたりの台数ではアメリカの五%、オーストラリアの八%という程度である。漁業中心で海岸が管理され、プレジャーボートの係留施設が不足している結果、管理が高価であるという問題もあるが、国民が海洋に関心がないのである。

その影響だけでもないが、水上スポーツも弱体で、ヨット競技もカヌー競技も、これまでのオリンピックではメダル一個という状態である。体力を必要とするスポーツはともかく、海洋クルーズでも日本は小国であり、人口あたりのクルーズ観光客数はアメリカの五%、イギリスの二二%、オーストラリアの一四%という程度である。これも旅行が高価など、言訳となる理由はあるが、国民が海洋に関心がないのである。

二一世紀のフロンティアは宇宙と海洋といわれる。宇宙については宇宙ステーション滞在や「はやぶさ」「あかつき」などが話題になるが、海洋は話題になることがない。しかし海洋は日本の将来にとって宇宙以上に重要なフロンティアである。日本には産業に必要な鉱物資源がほとんどないが、海底に沈殿しているマンガン団塊に含有されるマンガンは陸上の鉱山の三〇倍、ニッケルは六〇倍、コバルトは一四〇倍など大量である。

化石燃料をほとんど産出しない日本であるが、幸運なことに日本列島周辺の海底には膨大なメタンハイドレートの存在が確認されている。かつて不毛の砂漠であったアラビア半島が石油の発見によって一躍裕福な地域に変貌したように、これまで陸上の天然資源では不運であった日本も周辺の海洋には幸運が充満している。これに挑戦していくためには化学や技術も必要であるが、国民の意欲が必須である。

筆者は毎月のように、国内や海外の海岸をカヤックで航海している。我田引水だが、それは娯楽であるとともに、自然の魅力と威力を認識する絶好の機会になっている。途中から豪雨や強風にでもなれば、困難に挑戦する経験にもなる。クルーズでもカヤックでも結構だが、国民が海洋を経験する機会を増大していくことが、日本が二一世紀のフロンティアで発展する底力になるはずである。